

日本臨床皮膚科医会 東海北陸ブロック 学術講演会 後抄録

2014年10月19日（日）

望月 隆 （もちづき たかし）

金沢医科大学 医学部 皮膚科学

「皮膚真菌症の基礎と臨床をめぐる最近の進歩」

皮膚真菌症の、主に診断をめぐる今日の問題のいくつかを解説した。

菌名は、周辺科学の進歩に伴い、種の枠決めの方法が形態学的種概念、生物学的種概念（有性生殖により種を定義する）、系統学的種概念（分子生物学的解析により種を定義する）のそれぞれにより行われてきた歴史があり変遷は避けられない。近年では分子生物学の一層の進歩にともない、*Malassezia* 属をはじめ *Exophiala jeanselmei* や *Fonsecaea pedrosoi* への理解が進む一方、*Malassezia* 属には多くの新種が記載され、新たに皮膚真菌症の原因菌として *E. xenobiotica* や *F. monophora* などが記載された。また、*Sporothrix schenckii* の細分化も提示されている。さらに2013年には命名の基準になる植物命名規約自体の大幅な改訂があり、馴染んでいた菌名が変更される可能性がある。今後情報の入手、発信の際に注意が必要である。

皮膚真菌症の疫学の変遷にも注目したい。生活様式やペットとの関係の変容、温暖化、国際交流が関与すると考えられる変化が進行している。今後都市部のスポロトリコーシスの減少、*Malassezia* 毛包炎や黒癬の増加、*T. tonsurans* 感染症の一般社会への流行、ペットを介する人獣共通感染症の蔓延が予想される。その中であってわれわれ皮膚科医は皮

疹を丁寧に診て適切な真菌検査を行うことで社会的責任を果たしたいものである。特に最近行われることの少なくなった真菌培養は新興・再興感染症対策としてむしろ重要性が増していると考えられ、培養・同定のできる機関とのさらなる連携が望まれる。